

カイロ歴史地区の文化遺産アーカイビングと研究・教育実践

日時：令和6年11月27日（水曜日）15:00～17:00

場所：Zoomによるオンライン開催

吉村武典「画像デジタルコンテンツの利用と歴史学：カイロの歴史的建築物を題材に」

参加者：亀谷学・川本智史・熊倉和歌子・後藤絵美・佐藤将・深見奈緒子・吉村武典

今年度第2回となる本研究会では、共同研究員の吉村武典氏に、報告「画像デジタルコンテンツの利用と歴史学：カイロの歴史的建築物を題材に」をいただいた。

報告の構成は下記の通りである。

1. 中東・イスラームの歴史、芸術、建築に関するデジタルアーカイブス、データベース、コンテンツ
2. これまで関わったカイロ（エジプト）のデジタルコンテンツと悲しき現状
3. 現在関わるデジタルコンテンツ2点の紹介
 - ・カラーウーン VR プロジェクト
 - ・カイロの歴史的建築物 DB

最初に、中東・イスラームの歴史、芸術、建築に関するデジタルアーカイブス、データベース、コンテンツの現状について概観した後、報告者がこれまでに関わったカイロのデジタルコンテンツとそのコンテンツの現状について述べられた。以前、早稲田大学イスラーム地域研究機構に在籍していた報告者は、そこでフスタート遺跡出土遺物データベースやエジプトのキリスト教関連建築物データベースの構築に関わった。しかし、母体となる NIHU プログラムイスラーム地域研究プロジェクトの終了とともに、データベースを公開していたウェブサイトは閉鎖され、地域研究機構の閉鎖とともにデータも散逸し、大本となるデータセットを誰が所蔵しているかも追跡できない状況となっている。この事例を通じて、データの散逸を防ぎ、継承していくための仕組みづくりの必要性が提示された。次に、報告者が現在関わっている2点のデジタルコンテンツ（カラーウーン VR プロジェクトおよびカイロの歴史的建築物データベース）における学習や研究への利用事例について述べられた。

ディスカッションにおいては、データベース継承の問題が焦点となった。プロジェクトベースでデータベースを構築した場合、プロジェクトの終了とともにデータの継承が危うくなる問題をどう乗り越えるかについて議論された。また、機関で所蔵・管理するデータベースであっても、機関の予算が削減されるとその存続が危うくなる可能性についても指摘された。そのような議論の中で、データベースの作成を終着点とせず、データの追加・修正→利用の過程が循環し続けるようなデータベース運営をしていくことが重要であるという認識が参加者の中で共有された。そこで、現在本研究課題が取り組むデータベース構築作業において、より多くのユーザーに使ってもらえるような仕組みづくりは何かという問題について議論され、チュートリアルや教材としての動画コンテンツの制作や、既存のウェブサイ

トとの連携などが一案として出された。

文責 熊倉 和歌子